



災害に備える

副校長 柏原 学

雨が降る日が続いたり、晴れて暑くなったりと不安定な天気となっています。各地から災害に関するニュースも入ってくるようになりました。大雨による災害…。3年前の出来事が頭をよぎります。

「岡山県倉敷市真備町」。大雨で町の大半が浸水した地域で、私の妻の実家がある地名です。妻の家は被災しました。幸い、浸水した時は誰も住んでおらず、空き家でした。

その日、仕事を終え帰宅すると妻が電話してました。今は携帯がメインなので、めったに電話がかかってくることはないのですが、あれ、誰からだろうと思い、テレビを見ながら、聞き耳を立てていました。親戚からのようで長かったので、ん？何かあったのかなと思いました。テレビを小さな音にし、チャンネルを変えました。そこに映った映像は、倉敷市真備町が水没…。えっ、何。この電話、そのこと…。

その日は東京も雨が降ってました。しかし、真備町の雨はそんなレベルではなかったようです。岡山は「晴れの国」。災害や天災なんて絶対ない。神戸の震災時も岡山は大丈夫でした。だから住んでいる人は皆、災害はないと信じていました。

テレビを見てみると、知っている町並みが映りました。災害や震災などがある度、私の心の中に色々な思いが巡りましたが、実際身近ではありませんでした。遠い場所で起こっていること。自分たちのところは大丈夫。そう思っていました。でも、この時は違いました。

テレビに映っていたお年寄りのコメントがそこに住んでいる人たちの思いを代弁していました。「ここはぜったい大丈夫」「絶対に災害などない」「逃げなくても大丈夫」。

被災後1週間たった妻の家の中の実際写真



しかし、災害は現実になりました。絶対ということはないのだと私も自覚しました。妻の実家は1階が全て水に浸かりました。被災して1週間後、妻は帰省しました。目の前の情景を見て、どうしたらよいのか分からなかったと言っていました。

次の日ボランティアの方々がたくさん来て家の中の物を運び出してくれたようです。その夏、私も帰省し被災地に入りました。妻の実家2階の荷物整理のためです。

1か月経った真備町は所々にゴミの置き場はありましたが、ぱっと見た目は随分元の姿を取り戻しているように見えました。しかし決定的に違ったのは、どの家も1階がもぬけの殻であるというでした。水没したからそのようにせざるを得ないのです。2階に人影が見えました。そこで生活しているのです。これらの家は今後どうなるのだろうか。建て替えるのであろうか。それとも1階をどうにかして、リフォームするのだろうか。どちらにしてもまだまだ時間がかかるだろう。

ゴミの山はあちらこちらに存在していました。特に真備町図書館横のゴミの山はすさまじかったです。私たちが被災ゴミを捨ててに行ったのもここでした。

これでもう妻の実家には何もなくなりました。後は手続きをして、更地にするだけです。長年住んでいた家がこのようになる妻の気持ちはどうだったのだろうか。小さい頃からの思い出のアルバムだけ東京に持ち帰りました。

あれから3年。コロナ禍において、帰省ができないので、現状はどうなっているのか分かりません。一度水害にあった地域が復興するにはどれくらいの日々がかかるのでしょうか。

「備えあれば憂いなし」。災害が現実になったときどうすればよいのでしょうか。自分の命を守るために、そしてまわりの人の命を守るために行動したり判断したりできるのでしょうか。

つつじが丘小学校の地域はコミュニティ協議会が防災組織を結成し、毎年防災活動を行っていて、全国で紹介されたこともある防災意識の高い地域です。頼もしいと思う反面、災害がないことを祈るばかりです。

学校でもコロナ禍においても必ず毎月避難訓練を行い、火事や地震など、万が一に備えています。特につつじが丘小学校の避難訓練で誇れるのは、全ての訓練を一切子供たちには知らせていないということです。それでも子供たちはさっと行動することができます。今までの積み重ねのおかげです。

雨は恵でもあります。時に厳しい局面ももたらします。梅雨そして台風。この梅雨を機にもう一度自然の驚異に対して防災意識を高め、いざという時に行動できるようにしたいと思いました。